

## 「こども読書の日」に考える

「こども読書の日」は、家庭、地域、学校などで読書活動を進めるために 1959 年に日本書籍が中心になって始めた運動が起源です。後に 2000 年「子ども読書活動の推進に関する法律年」が定められ、国や地方公共団体が読書を推進する施策を行うよう法律が施行され、4 月 23 日を「こども読書の日」となりました。加えて 4 月 23 日は「サン・ジョルディの日」「世界図書・著作権の日」でもあり、4 月 30 日は「図書館記念日」と、子どもの読書活動の推進に関する基本理念を定めています。ただ、「こども」なのか「子ども」なのかを巡っては、いくつか議論があったようですが、5 月 5 日が「こどもの日」であることから「子ども」ではなく「こども」とするのが正しい使い方だと言われています。

さて、こうした中、児童・学生たちに読んでほしい図書としては、夢ある書籍が好ましいとは思いますが、今日のような政治によって社会が揺れ動く時代にあっては、学年が進むに連れて現実を直視する姿勢が求められているとも言えるでしょう。そこで、今回は戦争、とくにアフリカに関わる児童向け図書を紹介しておきたいと思います。

世界情勢からすればウクライナやパレスチナに関わる問題は見過ごすことはできませんが、同時に他の地域でも人びとの安全と平和を脅かす紛争が続いていることも事実です。こうした中、私が興味・関心をもっている「はるか遠いアフリカ」の問題は、距離的に遠いこともあって日本ではあまり扱われることはありません。そこで、せめて絵本や児童書を通じてアフリカについて学び、想像力を働かせることに期待したいと思います。

アフリカ大陸と言えば、北の世界一広大な乾燥地域や豊かな自然、素朴な生活を思い浮かべる人も多いでしょう。しかし、現実的にはコンゴ民主共和国、スーダン、中央アフリカなど資源を巡る大国の争いと、それに巻き込まれたアフリカ現地の勢力、さらには苦しい庶民生活などがあります。これらの絵本を通して、彼らの生活を垣間見てもらえれば幸いです。また、ここでは、紛争地域としてだけでなく、私たちの生活とは切り離せないレアメタルを巡る地下資源争奪戦やジェンダーに関わる問題など、深刻な話題を投げかけています。

ここでは 4 冊の本を紹介しておきましょう。いずれも校長室にありますので、関心のある方は気軽にお尋ねください。

■文:カレン・リン・ウィリアムズ, カードラ・モハメッド 絵:キャサリン・ストック, 訳:小野寺 美奈, 富銘 美菜, 山西 優二, 前田 君江 (2024) 『ぼくのなまえはサンゴール』 ゆき書房, 32 頁.

内戦により生まれ故郷のアフリカ大陸のスーダンを離れてアメリカ合衆国に移り住んだ主人公が異なる社会の中で「難民」としてどのように生きたかを描いた作品。UNHCR によれば、2022 年の全世界の難民は 1 億 840 万人という。

■文:ヴェロニク・タジョ 絵:ベルトラン・デュボワ, 訳:村田 はるせ (2018) 『アヤンダ おおきくなりたくなかった おんなのこ』 風濤社, 32 頁.

西アフリカ、ギニア湾岸の国コートジボワール育ちの作者が、架空の国を題材に、戦争で父を失った悲しみから、いかにして脱して社会の中で生きる意味を見出すことができたか…心の葛藤を描きつつ、理不尽な戦争という行為について語る。

■アリス・ミード, 訳:横手 美紀 (2005) 『イヤー オブ ノーレイン 内戦のスーダンを生きのびて』 鈴木出版, 221 頁.

アフリカ大陸北東部に位置するスーダンは、自然環境・民族・宗教・旧宗主国・地下資源など多くの点において、南北の環境は異なり、長年紛争が続いて来ました。これらの対立に奔走される一人の少年の生き様を描いた読み物。

■文:ジョゼ・ジョルジュ・レトリア 絵:アンドレ・レトリア, 訳:木下 真穂 (2024) 『戦争は、』 岩波書店, 64 頁.

「戦争は何も知らない人たちの柔らかな夢に入りこむ。」 — ポルトガル出身のレトリア親子が、戦争の怖さや痛ましさ、無意味さを訴えた絵本。シンプルな絵と数少ない限られた素朴な文字を通して、戦争という化け物の正体を描き出す。